

ネルヴァルのケルト幻想

田村 毅

(はじめに)

ケルト語を話す人々は、紀元前 1500 年頃からヨーロッパ大陸と、ブリテン諸島に広く居住した¹。ケルト語はインド＝ヨーロッパ (印欧) 語族の一分派で、その起源としては、南ドイツや東欧、中央アジア、あるいはブリテン島やアイルランドの島々では、大陸とは別に独自のケルト語文化が発展したという島嶼説、等、諸説ある。「ケルト人²」は、紀元前 8 世紀頃までにはガリアの地に移住し、共通言語としてのケルト語と宗教・神話体系を浸透させた (非ケルト系言語を用いた南西部のアキタニアを除く³)。大陸でもっとも活発な移動・侵攻を行ったのは、紀元前 5 世紀から前 3 世紀にかけてであり、イタリアからギリシア、小アジアまで進出した。独自の神話体系をもつ古代ケルト人の宗教では、ドルイドと呼ばれる祭司が儀式を司祭したが、一切は秘儀とされ、教義の記述はなく、ギリシア・ローマ人の証言からうかがい知るしかない⁴。

紀元前 1 世紀頃に、カエサル『ガリア戦記』に登場する、ローマ軍に敵対するガリア人 (ゴローワ) の大半が、ケルト語系方言を話す諸族であった。ローマ帝国支配下のガリアでは、先住のケルト語系ガリア人と、ラテン語系諸族 (広義でのローマ人) との融和がなされた (ガロ＝ロマン文化)。

紀元後 3 世紀ごろからは、ローマ帝国の衰退にともない、北方からゲルマン語系フランク族の移住・侵攻が始まり、キリスト教に改宗したフランク族

¹ ケルト語は多民族の共通言語で、個々の地域や種族ごとに方言がある。ケルト研究は 21 世紀の今なお進行中であり、概要「はじめに」については、各種文献を参照したが、参考図書としては本論に直接関係するもののみを引用する。年代に関しても諸説あり、おおよその目安程度で、各種の説を紹介しない。

² 本論では、以下、各ケルト語方言を話す諸族の総体を指す語として用い、単一の人種や民族を意味しない。

³ カエサル『ガリア戦記』に「(非ケルト語系種族の住む) アキタニア」の記述があり、古代のバスク語を話す人々が住んでいたとされる。

⁴ 「ドルイド」は、古代ケルト人の宗教的指導者、祭司、貴族階層に並ぶ賢者、医薬に通じ治療にあたる魔術師。また、霊魂の不滅と、死の神が世界の主宰者と信じるケルト人の宗教を、一般に「ドルイド教」と呼ぶ。

の支配下に、ガリア（ゴール）のキリスト教化が進んだ。やがてケルト系ガリア人は、異教を信仰する蛮族とみなされ、ドルイド教の祭儀が禁じられ、ガリアの中央部では、ほぼ紀元後5世紀頃までに、言語・文化の独自性を失っていった（ブルターニュ半島ケルト語系ブルトン語地域を除く）。

18世紀に、「インド＝ヨーロッパ（印欧）祖語」という概念が創出されたのに伴い⁵、その一分派としてケルト語も再認識されたが、19世紀前半のフランスでは、いわゆる「ケルト人」については、一般的にはあいかわらずギリシア・ラテンの古典文献に基き、古代ガリアの先住民である異教の未開人という程度の漠然とした概念しかなかった。考古学的発見（ハルシュタット文化、ラ・テーヌ文化⁶）と調査が行われ、その成果が発表されるのは、19世紀後半以降であり、20世紀になってようやくケルト文化研究が飛躍的に進歩した。

「祖語」とは、類縁関係にある各種言語の祖として想定される仮想の共通基語であり、18世紀フランスの先駆的な思想家は、例えば「原始言語」（「言語と文字の起源」、「普遍的・比較文法」⁷）などとも呼んだ。言語起源の探求が、ゲルマン人やケルト人の共通の祖先の探求に向かう。（当初は、古代サンスクリット語との連想から、探求はインドに向かった。）一見奇異にもみえる、混沌たる思想活動のなかから、やがて比較言語学や比較神話学へと発展する発想が生まれてくるのである。

他方で、18世紀後半に、スコットランドの作家マクファーソンが発見したと称する（実は多分に彼の創作によるものなのだが）、ケルト語系ゲール語で書かれた長編叙事詩の英雄譚『オシアン』（作品集の総称）が、ホメロスやウェルギリウス以来の神話文学として、ヨーロッパ各国語に翻訳され、多大な影響を与えた。ギリシア・ローマの古典を範とし、汎ヨーロッパ的文芸に普遍的な価値を見いだそうとした「古典主義」に対して、各国に固有の言語文化の伝統を再認識する文芸思潮を惹き起こした。その新たな思潮（「ロマ

⁵ 当初はゲルマン語系の学者によって「インド＝ゲルマン語」と称され、後に英語系の学者によって「インド＝ヨーロッパ語」と改められた。ネルヴェルは、ドイツ・ロマン派の影響下に前者を用い、後者は用いていない。

⁶ 発掘は、オーストリア Halshtatt (1846-), スイス La Tène (1857-); 前者は紀元前1200-475, 後者は紀元前450-前1世紀頃までつづいた文化。

⁷ « La langue primitive », « Origine du langage et de l'écriture », « Grammaire universelle », in Antoine Court de Gébelin, *Monde primitif*, 1781.

ン主義)のなかで、北欧神話やゲルマン神話が発掘され、一連のアーサー王伝説や『ローランの歌』などの中世文学が再認識される。ロマン主義はドイツを中心に理論化されて文芸思潮をなし、やがてフランスに波及すると、華やかな文芸運動(詩、演劇、小説)を誘発したが、「国民文学」の原点を見いだそうとする文芸復興運動でもあった。

「ガリアの地におけるケルト文化」の再認識は、このような思潮の中で生まれ、シャトーブリアン、プロスペール・メリメ、あるいはミシュレやルナン、等の作品に、ケルト人やドルイド教への言及が散見されるようになる。

1850年頃からネルヴァルの作中に時折、現れるようになる「ケルト、ゴローワ、ドルイド」に関する記述には、ガリアの地がキリスト教化される以前に存在したケルト文化(とくにドルイド教)に対する、独自の強い関心がうかがわれる。彼の「ケルト探求」には、直接的・間接的にシュレーゲル兄弟やグリム兄弟をはじめとするドイツ・ロマン派の影響が色濃く見られる⁸。ネルヴァルは、異教の神々を求めてオリエントを旅したのと同様に、自らのルーツを求めて時を遡り、古代文明に信仰の多様性を求め、汎神論的で開放的な宗教思想に共感しつつ、自己救済を祈願する「ケルト探求」の旅路を想い描くのである。

モンマルトルの石切場に「ドルイド教の神殿」を見る

残念ながら、今日では大きな石切場は閉鎖されている。シャトー・ルージュ[赤い城]側にひとつ残っていたが、それは四角い天井を支える高い柱をそなえた、ドルイド教の神殿のようだった。その闇の奥をのぞき込むと、——エスカトート、あるいはケルヌノスといった、われらが祖先の恐ろしい神々のすがたが浮かび上がり、身震いを感じた。(『十月の夜⁹』)

ネルヴァルの『十月の夜』では、パリを散策するうちに夜が更け、街並みがしだいに幻想的な情景に変化してゆく。主人公は、ふと、モンマルトルの石切場で一夜を過ごそうと思いつく。かつて、キューヴィエが恐竜の骨を発

⁸ Voir Jacques Bony, « Celtes », in Cl. Pichois et M. Brix, *Dictionnaire Nerval*, Du Lérot, Tusson, Charente, 2006, pp. 94-95.

⁹ « Les Nuits d'octobre », *L'Illustration*, 9 oct. 1852 ; *npl. III*, p. 316. : sigle : *npl. I*. (nouvelle édition de la Pléiade par Jean Guillaume et Claude Pichois) : Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, Gallimard, « la Pléiade », t. I (1989) ; *npl. II*, t. II (1984) ; *npl. III*, t. III (1993).

掘した古生物学発祥の地であり、その作業に加わった職人たちが残っていれば、話を聞けるかもしれないと思ったのだ。しかし、その石切場もすでに閉鎖されていた。ひとつ残っていた石切場の方に目を向けると、暗闇のなかで、石を切りだした跡の残る崖の斜面や切り出された石が、古代ドルイド教の神殿のように見え、その奥から二神が今にも姿を現すかのように見えるのだった。

なぜ、モンマルトルの石切場に「エスとケルヌノス」が登場するのか。古代ガリアやドルイド教へと読者を誘う幻想ではあるが、モンマルトルの夜景に浮かんできたこの突飛な想像は、何から由来するのだろうか。

19世紀初頭から、環状列石（ストーンサークル）や巨石建造物（ドルメン、メンヒル）は、ドルイド教徒たちが造ったのだと主張する人々が現れた（いうまでもなく時代錯誤である）。そして、ケルト語系ブルトン語を話す人々が住むブルターニュ半島を中心に、一部の熱烈なケルトマニアたち（古代ケルト人を祖として崇敬し、古代ケルト文化を理想として崇拝する人々¹⁰）が、巨石遺構の場で「ドルイド教の祭」と称する儀式を催した¹¹。

おそらくネルヴァルは、類似の連想からか、石切場をドルメンやメンヒルなどの古代の巨石建造物に見たてて、「ドルイドの神殿」を想い描いたのであろう。

トートは、エジプト神話ではトキ（あるいはヒビ）の頭をもつ知恵の神のギリシア名であり、ヘルメス神と同一視されるが、ネルヴァルがなぜエジプトの神トートをゴーロワの二神に関連づけているのかは、不明である（エスは、今日ではむしろ戦の神として、軍神マルスに相当すると見なされている）。ただし、後述するように、ネルヴァルは、「ケルヌノス」を「ケルノス」とあいまいな記憶で引用しているので、「トート」もゴーロワ第三の神の代用かもしれない¹²。

¹⁰ « celtomanes », mot utilisé en 1838 selon le *Dictionnaire Le Robert, 1970*.

¹¹ 例えば、鶴岡真弓、松村一男、『図説ケルトの歴史：文化・美術・神話をよむ』（河出書房新社、1999）には、「19世紀初頭に西ヨーロッパの巨石建造物が、ケルト人が造った〈ドルイドの神殿〉と解釈され注目を浴びるようになった」（p. 14）、〈巨石記念物と現代のドルイド〉（p. 119）の解説がある。

¹² 下記の註(19)参照。

聖人像にゴーロワの神々を見る

『十月の夜』のほぼ2年後に発表された『オーレリア¹³』にも、ドルイド教の二神が登場する。

『オーレリア』の後半で(II-4¹⁴)、ネルヴァルはなぜ自分がキリスト教を離れ、異教の神々に惹かれたのかと、自らの宗教体験のルーツを探る。その過程で、「奇妙な伝説と異様な迷信に満ちた」故郷のヴァロワ地方と、その土地に住む伯父の影響を再認識するのである。伯父は、少年ジェラルルの問いに、「神、それは太陽だ」と答える人物であり、趣味として「古代ローマやケルト」に関心を抱いていたという。

村の教会の正面入口を飾る聖人像は、「この地方のある学者たちによれば、ガリア人たちのエススとケルヌノスだという¹⁵」。

聖人像のなかに、ドルイド教の神々の姿を見るという発想そのものが、いかに「異様な迷信に満ちた」土地柄とはいえ、あまりにも現実離れしているようにも思える。なぜ、ここにも「エススとケルヌノス」が登場するのだろうか。

『オーレリア』は半ば自伝的な作品なのだが、作中で作者が育った土地の名が明かされることはない。伝記研究によって、ジェラルル少年が育てられたのは、ヴァロワ地方の小村、モルトフォンテーヌであることがわかっているが、その村の教会の入口には、聖母マリア像とサン＝ドゥニ像があるという¹⁶。特徴的な聖母像や、首をかかえた姿のサン＝ドゥニ像とでは、エススやケルヌノスと混同のしようもない。しかしながら、仮想にすぎないにせよ、聖人像のうちにケルトの神々の姿を見ようとするネルヴァルの想像力の方向性に、われわれは関心を惹かれるのである。

¹³ « Aurélia ou Le Rêve et la Vie », *Revue de Paris*, 1^{er} jan.1855 ; 15 fév. 1855.

¹⁴ *Npl. III*, p. 730.

¹⁵ *Ibid.*, p. 731.

¹⁶ Jaque Bony 氏の調査。 *Npl. III*, p. 1359, (p. 731, n. 1).

ゴローワの神々の発掘

ノートル・ダム・ド・パリ大聖堂の祭壇が、ルイ 14 世の命により改修された。1711 年、その基礎工事の最中に、地下祭壇（クリプト）の床面を支える基礎杭として用いられている 4 つの巨大な石のブロックが発見された¹⁷。

今日では、4 つの石は、それを積み上げると高さ 6 メートルの石柱になり、側面に刻まれたラテン語碑文から、セーナ川の船乗りたちがローマ皇帝ティベリウスに捧げ、ローマの神々とケルトの神々の像を刻んで、航行の安全を祈念した石塔であったことが判明した。「船乗りの塔」と呼ばれる。

各々の石の 4 面には、古代ローマの神々、ユピテル（ジュピター）、メルクリウス（メルキュール）、ウォルカヌス（ヴォルカン）等とともに、4 人のケルトの神々の像と、ラテン文字で各々の名前が刻まれていた（エスス、ケルヌンノス、タルウォス＝トリガラヌス、スメルトリオス¹⁸）。それまで漠然としか知られていなかったケルトの神々の図像と名前とが明らかになり、また、大聖堂の地下からの発掘というドラマチックな状況とも相まって、西欧社会に衝撃を与えた。

発見から 1 世紀以上たってもなお、その衝撃はつづいた。1846 年の挿絵入り雑誌『マガザン・ピトレスク』には、2 回にわたって「ノートルダムのゴローワ遺跡」と題する紹介記事が載っている¹⁹。その解説では、発掘記録(1711)に従い、4 つの石塊を、ドルイド教の巨石信仰に結びつけ、それぞれを別の祭壇と見なす。また、「スメルトリオス」の名前は、刻まれた文字が欠けていたので、発掘時以来、1846 年の時点でもまだ判明していなかった。4 人の神々のうち、3 羽の鶴を背に乗せて雄牛の姿をしたタルウォス＝トリガラヌスを除き、擬人化されたエススとケルヌンノスという二神の名前を、ネルヴァルは引用しているのである²⁰。

¹⁷ Charles César Budelot de Dairval, *Description des bas-reliefs anciens trouvez depuis peu dans l'Église Cathédrale de Paris*, à Paris, chez Pierre Cot, 1711. 図版入りの発掘記録。

¹⁸ *Npl. III*, pp. 1100-1101, n. 3 : Esus, Smertrios, Tarvos trigaranus, Cernunnos ; voir les photos : <http://www.musee-moyenage.fr/collection/oeuvre/pilier-des-nautes.html>.

¹⁹ « Monument gaulois de Notre-Dame », *Le Magasin pittoresque*, 1846, pp. 215-216 ; pp. 355-356. (Voir *npl. III*, pp. 1100-1101, n. 3.) 図版等は前記註の発掘記録を写す。

²⁰ ネルヴァルはあいまいな記憶で 2ヶ所（雑誌記事『十月の夜』と『オーレリア』校正刷り）で、「Cérunnos」と綴る（*npl. III*, p. 1359, variante (a) de la p. 731）。『十月の夜』で引用された第三神「トート」も、「タルウォス・トリガラヌス」の代用なのか、記憶違いか、『オーレリア』では引用されない。

同雑誌の解説によれば、エスは、ドルイド教で神聖な木とされるヤドリギを人間に与えるために、「鉋をもってヤドリギを切り取る」姿で描かれているという（図からは単に木の枝を鉋で払っているだけに見える）。枝分かれした鹿の角をもったケルヌンノスに関しては、狩の神か、あるいはゲルマン語からの類推によるあいまいな語源説を援用して、酒神バッカスに相当するのか、意見が分かると解説している。ケルトの神々の権能は未だ定かではなく、ネルヴァルと同時代の知識は全般において漠然としていた。

教会の下に埋もれた古代異教の神殿

ノートルダム大聖堂の下から、ドルイド教の神々の像が刻まれた「船乗りの塔」が発見されたことは、百年以上たった19世紀半ばにおいてもなお、雑誌に載るほどの衝撃を与えていたが、ネルヴァルにも強い印象を与えた²¹。

フランスだけに限ってみても、メロヴィング朝の王たちが改宗したことで²²、国全体がキリスト教化された後も、異教信仰が長い間存続しつづけたことを認めよう。特定の聖なる場所や、神殿の廃墟、そして彫像の破片に対してさえも、民衆が尊敬の念を抱いていたために、キリスト教の司祭たちは、古代異教の神殿があった場所に、大部分の教会を建築せざるをえなかった。（『幻視者²³』）

教会の地下に異教の神殿を見ることは、聖人像にケルトの神の像をみる視線にも通ずる。はたして、実際にそのような聖人像が存在したのか、疑問が残るが、いずれにせよネルヴァルは、意図的にヴァロワの地をケルトに結びつけようとしているようである。

²¹ 但し、「船乗りの塔」がもともと聖堂の下にあったわけではなく、パリ北方のサン＝ドゥニ近く市場 *Foire du Lendit* にあった、その後セーヌ川の護岸工事に用いられていたのを転用した、等、諸説ある。

²² メロヴィング朝フランク国王クロヴィス一世（465? – 511）は、数千の戦士と共にカトリックに改宗し（497年頃）、ローマ教会と協調関係を結び、王国発展の基礎を固めたとされる。

²³ Gérard de Nerval, « Cagliostro », in *Les Illuminés, npl. II*, p. 1119 ; (la version préoriginale, *Le Diable Rouge, l'Almach cabalistique pour 1850, 1849*).

ケルト語探求の旅路

ネルヴァルのケルトへの関心は、さらに遡ると、1841年3月31日付で、内務省芸術局長オーギュスト・カヴェに宛てた書簡にみられる。精神病の発作で入院した病床から書いた手紙であり、恢復しつつあるので、研究の旅に出るために、政府の資金援助を願うものである。

文中には、北方の旅と、南仏を回る旅路が描かれる。後者については、

「わが国のケルト地方の方言が、ポルトガル語、（コンスタンチノーブルの）アラブ語、フランク語、スラブ語、そしてペルシャ語とヒンズー語とさえ、なみなみならぬ類縁関係を有することを証明するのに、15年来、私がつづけてきたオリエントの歴史と文学の研究が、役立つことでしょう」と、書く²⁴。

ネルヴァルの関心は、文面から見る限りでは主に比較言語学的なものであり、「ケルト地方（複数）」（つまりかつてケルト語を話していた地方）を巡って調査するというものであり、旅路は、北半周と南半周でフランス全土を網羅するものになっている。ただし、ケルト語系ブルトン語を話すブルターニュ半島（アルモリカ）の旅は別途設定するという。ケルト語との言語学的な類縁関係についても、一見すると書き手の妄想であるかのように見えるが、当時の比較言語学やケルト語研究の状況を考慮すると、あながち根拠のないものではない。

すでに紹介したように、18世紀後半から、比較言語学の研究が進むと、サンスクリット語と古典ギリシア語やラテン語との類似から、共通の起源とする印欧祖語が措定された。その下位区分としてケルト語派がゲルマン語派等と並んで系列（分派）に設定され、ケルト語研究は、比較言語学の一分野として発達した。

今日では、狭義での「ケルト語派言語」としては、ガリアに限れば、ブルターニュ半島のブルトン語や、古代ガリア語が挙げられる。ネルヴァルはブルターニュ旅行は別に設定すると手紙に書いているので、フランスの南半分で探求するのは、主に古代ガリア語の痕跡であろう。

手紙では、「ケルト」を「オリエント」と結びつけたいという、ネルヴァルの想像の旅路は、さらに飛躍する。

²⁴ *Npl. II*, p. 1379

わが国の出先機関が存続しているエジプト、ペルシャ、そしてインド半島において、ケルト人が移住した最初の遺跡の発見に成功したいと願っております²⁵。

提案した国内の調査旅行は実現しなかった。しかし、この書簡から1年後に、ネルヴァルはオリエントを目指して旅に出る。今日の知見では、ケルト人がエジプトや中近東まで移住した（あるいはその逆で、エジプト・中近東からケルト人が移動してきた）という痕跡はない。やはり18世紀的な「普遍神話」（地理的・歴史的に普遍的な言語文化が存在すると措定する思想）の発想であり、架空の普遍的言語としての「印欧祖語」を、古代サンスクリット語からさらに遡って想定するのと、類似の想定なのだろう。このようなネルヴァルの発想には、たぶん18世紀の先駆的な思想家たちの影響が見られる。

ケルトの英雄ラーマ

同じ手紙文中に、「ラーマ、ハンニヴァル、ローラン、デュゲクランは、ブルボン家最後の王たちや、ナポレオン自身よりも、見事にピレネー山脈を越えた」という一節がある。ハンニヴァルはカルタゴからピレネーとアルプスを越えてローマへ侵攻し、『ローランの歌』の主人公はスペイン遠征からの帰路にロンスヴーの谷で戦死した。英仏百年戦争の勇者である元帥デュゲクランもまた幾度かピレネーを越えてスペインに遠征した。では、インドの長編叙事詩『ラーマヤナ』の英雄ラーマがなぜここに登場するのか。

1838年、パリでインドの舞踊団の公演があった際に、ネルヴァルが書いた劇評がある。

演奏家たちはほぼ同様に、ケルトの吟遊詩人（バルド）たちの衣装を身につけ、
[...] ケルトの英雄たるラーマは、極北の兵士たちの先頭に立って、黒人の種族に占領されていたインドを征服し、彼らをエチオピアへと追い返した²⁶。

「極北の戦士たち」を引き連れたラーマは、北から南へ、「ケルトの吟遊詩人（バルド）たちの衣装」が示すように、スコットランド（あるいはアイルランド）から、（イベリア半島北部に渡り、ピレネーとアルプスを越えて）イ

²⁵ *Ibid.*

²⁶ « Les bayadères à Paris », *Le Messager*, 12 août 1838 ; *npl. I*, p. 447.

ンドに侵攻し、黒人の種族をエチオピアへと追い落とす、壮大な軌跡が描かれている。このような発想には、18世紀の神秘思想家アントワーヌ・ファーブル・ドリヴェの影響があることが指摘されている²⁷。この思想家の「北方起源のケルト」と題された一文には、「北方の種族が […] 黒人種族の攻撃にさらされ」という類似の表現が見られる²⁸。

年代不詳の一枚の草稿「イタリア旅行、パノラマ」に、ネルヴァルは、「北方の種族の征服者ラーマが、すべての国々をその王杖の下に従えた」、「黒人種族はアフリカの砂漠まで追い払われた」と断章を書きつけているが、これはより直接的に思想家の著作の読書メモであるように思われる²⁹。

ネルヴァルは、ケルトの長編叙事詩『オシアン』にならって、サンスクリット語で書かれた『ラーマヤナ』の主人公を、古代ケルト建国の英雄に見立て、他方では、ドイツ・ロマン派の信奉する北欧神話、とくに『ニーベルンゲンの歌』に対抗して、長編叙事詩『ラーマヤナ』を、ケルト建国神話として評価しようという試みの一端が、「ケルトの英雄ラーマ」だったのかもしれない。その試みは劇評にとどまり、作品として成果を示すにはいたらなかった。

しかし、ネルヴァルのインドへの関心は、後年、インドの大長編劇（4世紀頃の王スードラカ作）を翻案した『おもちゃの小車』（メリーとの共作）にもみられる。公演（初演 1850.5.3）とほぼ同時に出版された脚本の序文に（おそらくネルヴァル自身の筆であろう）「インド＝ゲルマン語」への言及がある³⁰。

学者たちの想定に留意するならば、ケルト族とフランク族は、同じインド＝ゲルマン語族の枝族をなすのであり、両者の民族移動がヨーロッパ中央部に人口を増殖してきたのであるから、インド原作の劇とわれらが劇作とが描き出す風習や人物像の特異な関係に、驚くにはおよばない。

つまりは、フランス・パリの舞台にのせるために、原作を大幅に縮小し、風習や人物像も変えざるをえなかったのだが、同じ「インド＝ゲルマン語族」

²⁷ Voir Jacques Bony, article cité.

²⁸ Antoine Fabre d'Olivet, *Histoire philosophique du genre humain*, (2 vol., 1824). Réédition : Éditions traditionnelles, 1966, t. 2, pp. 457-458.

²⁹ *Npl. III*, p. 776.

³⁰ *Le Chariot d'enfant* : drame en vers, en 5 actes et 7 tableaux, traduction du drame indien du Roi Soudraka, par MM. Méry & Gérard de Nerval, Giraud et Dagneau, 1850.

のうちなので、許されるはずであるという、作者たちの弁明にすぎないのである。しかし、「インド起源のケルト」と「民族移動」という観念は、ネルヴァルの頭のなかに、あいかわらず固定観念のように宿っている。ちなみに、この野心的で大胆な劇作（翻案）の試みも、観客の興味をひくには時期尚早だったのか、作者たちの意に反して、上演は不成功に終わった。

「ケルトマニア」あるいは先駆者たち

東方旅行からの帰国後(1843.12)、ネルヴァルは、東方旅行関連の記事の連載をつづけ、やがて『東方紀行』(1851)と題する本にまとめて出版する。しかし、その文中に、「ケルト」への言及はない。オリエントに「ケルトの痕跡」を見いだせなかったようである。

ところが、先に『カリオストロ』(初出 1849)を引用したが、一連の旅行記事と並行して書かれた神秘主義者の系譜（『幻視者』）に位置する『クイントゥス・オークレール』(初出 『共和国の異教徒たち』1851)には、「ケルト」への考察が見られる。

クイントゥス・オークレールの逆説的な言辞（パラドックス）は、次のようにしめくられる。「ゴーロワとケルトの種族たるフランス人よ、ベルギー人よ、おまえたちは野蛮人どもが執着していた信仰からついに解放されたのだが、いかなる民族も確固たる宗教を必要とするのだ。クロヴィスの改宗以前におまえたちはどうだったのか。おまえたちは、かの偉大なローマ帝国に属していたのだ [...]」。³¹

「ゴーロワとケルトの種族たるフランス人とベルギー人」とは、カエサル『ガリア戦記』にも記載されている、ケルト系ゴーロワ族のうちの2種族で、ガリアのゴーロワ族とベルガエ（ベルギー）のゴーロワ族とされる。クロヴィスがキリスト教に改宗する（497年頃）以前には、長い間（少なくとも4,5世紀間）、ガリア人たちは、ケルト人伝来のドルイド教の神々を、ローマの神々と同様に崇拝しつづけていた。

ケルトの神々は、われらがゴーロワの祖先たちの言語に翻訳されて、実際にはローマ人の暦の神々と同じだと見なされたのである。月曜日は、Moon-tag (lundi) 月の日、Tues-Tag (Mardi) 軍神マルスの日、Wednes-Tag (Mercredi) 商いの神メル

³¹ *Npl. II*, p. 1152.

クリウスの日、 […] —— これは、アジアの高地から移住してきた原始ケルト民族に固有のインドの言語では、次のように表現される。Tinguel, Cheroai, Bouda […] これら是对応する神々の名前である³²。

「原始ケルト民族に固有のインドの言語」とは、奇妙な発想だが、古代サンスクリット語を指すのだろう。曜日を示すラテン語、ゴローワ語、（原始ケルト人の）古代インド語との対応関係から、ケルト人のインド起源説を示す。神秘思想家に倣って、ネルヴァルの想定する起源説は、印欧祖語との関係で、オリエントをへてインドまで起源を辿ろうとするものようだ³³。

ガロ＝ロマン文化において、ケルトの神々が、ローマの神々と相応関係をもちつつ共存し崇拜されていたことは、「船乗りの塔」にも明示されている。

18世紀の神秘思想家を介して、強引な語源説を駆使した、風変わりな「ケルト」観ではあるが、キリスト教以前に文化はなかったとされた未開のガリアの地に、ローマの神々と共存してゴローワの神々が存続し、独自の言語と文化が存在していたことを再認識しようとする萌芽的な思想として、ネルヴァルはクイントゥス・オークレールの説を紹介するのである。この神秘思想家もまた、大仰に言えば先駆的な比較言語学者であり、「ケルトマニア」のひとりだったようである。

『幻視者』には、「社会主義の先駆者たち」という副題が付され、出版後に副題は正確ではないと批判されたが、少なくとも思想家たちの著作の一部には、19世紀後半に発展する「比較言語学」や「比較神話学」の先駆的な思想の萌芽が見られるのであり、ネルヴァルはそこに着目したといえよう。キリスト教以前に、「異教徒」であった祖先として「ケルト、ゴローワ、ドルイド」を見る思想家たちの視点に、ネルヴァルは共感を抱いたのである。

かくして、『東方紀行』では、痕跡も見つからず、紀行文の枠組では書くこともできなかったケルト人について、ネルヴァルは、神秘主義者の思想の系譜に、かなり自由に、探求の痕跡を書き込むことができたのだった。

³² *Npl. II*, p. 1157.

³³ 18世紀以降、ケルトのオリエント起源説は、「印欧祖語」からの発想で流布したと思われる。オリエントを「中近東」ではなく、漠然と「東方」とするならば、アナトリア（トルコ）説や、黒海・カスピ海北方説は、今日でも仮説として提唱されている。但し、ケルト諸民族の単一（共通）起源説や民族移動説には疑問も呈されている。

ケルト族対フランク族

さらに、ケルトへの言及については、連載が中断され、未完のままに残された歴史小説『ファイヨール侯爵』(1849)にも見いだせる。登場人物を介して、人種論や人相学(当時流行の骨相学³⁴)と結びつけて、フランク族とケルト族を論じる、奇抜な発想が紹介される。

ゲルマン族の一枝族であったフランク族が、明らかに、ガリアの大半を征服し、
[...] コーカサスの部族に今でも純粹な形で存在している封建制度を、ガリアの地に導入した³⁵。

フランク族が勝者として、ガリアの地に封建制度を導入し、貴族階級を形成した。それ以降、貴族階級には綿々とフランク族の血筋が流れている。それに対して市民(ブルジョワ³⁶)は、敗者で被抑圧者であったケルト族の血筋を引くのだと、オリエント各地を旅行してきた博識の青年シャスブフ(ヴォルネ伯爵)が自説を展開する。

捨て子として育てられた主人公ジョルジュは、実はファイヨール侯爵の実子なのだが、本人はまだ知らない。その彼の人相を観て、シャスブフが言い当てる。

彼は、出自としては、ゲール人でも、キムリ人でも、ケルト人でも、古代のイベリア人でもない。——この4種が学問上認められた用語なのだが、——一般的にブルジョワ種族の特徴であるところの——ガロ=ロマン人ではないのだ。彼はフランク族だ、貴族なのだ……³⁷

19世紀前半の「ケルト民族移動説」を考慮せずに、簡略化して解説すると、ゲール語はアイルランドやスコットランドのケルト系言語、キムリック(ウェールズ)語はブリテン島西部ウェールズのケルト系言語、古代イベリア語

³⁴ 骨相学 *la phrénologie* は、ドイツの医者ガル Franz Joseph Gall が提唱したが、フランスでは、頭蓋骨局部の形状から性格が決定されるという俗説として発展し、19世紀前半に流行した。

³⁵ *Npl. I*, p. 1156.

³⁶ 小説は大革命期の王党派の反乱を描くが、「貴族対ブルジョワ」の図式は、フランス大革命よりも、七月革命期のものに近い。

³⁷ *Npl. I*, p. 1157.

は、スペイン北部とポルトガルに移住したと想定されるケルト人の言語である³⁸。4 種族に（上位概念である）ケルト語を含めるのは矛盾しているが、小説の舞台がブルターニュ半島であることを考慮すると、ここで「ケルト語」とされているのは、一般的な「大陸のケルト語³⁹」ではなく、「ケルト語系ブルトン語」を示すのであろう。ブルトン語を中心とするケルト系言語に関する学術的な列挙になっているのだが、要は、言語上の分類を、人種的な形態的特徴をもつものとして展開し、さらにそれを社会階層上の二分化（貴族対ブルジョワ）に応用するという、今日の視点からすると極めて特異な思想であり、奇妙な発想に見える。しかし、印欧語族を探求する「比較言語学」が人種論や民族論へと拡張され、当時流行の「骨相学」と結びつき、「ケルト」の人種や諸民族の特徴（頭蓋の形状、「金髪に青い目」、等々）として記述される風潮が、19 世紀前半のフランスには確かにあったようだ⁴⁰。ネルヴァルは、登場人物（シャスブフ・ヴォルネー伯爵）の「人種論・骨相学」を、半ば学術的に、半ば戯画化して、世相諷刺として展開しているのである⁴¹。

しかしながら、フランク族対（ケルト系）ゴーロワ族を、貴族対市民（民衆）に見立てる発想は、俗説といえども根深いようで、ネルヴァルの初期詩篇にも見られる。

かつて、一連のナポレオン叙事詩と政治風刺詩を書いて、文壇にデビューした二十歳頃のジェラルール青年（まだネルヴァルとは名のっていない）は、政治風刺詩『民衆』（1830）で、

フランク族の誇りもゴーロワ族のもとに屈する⁴²

と、七月革命の昂揚のさなかに、革命によってついに貴族階級が民衆に屈したことを、フランク族対ゴーロワ族という比喩を用いて歌ったのである。一般に、諷刺や笑いを好む「ゴーロワ精神」を民衆のものとする、「ゴーロワ」の語の定型的な用法の延長上にある。

³⁸ Le gaélique (irlandais et écossais), le kimrique (cimrique, gallois), le celtibérien (espagnol et portugais), le celto-breton.

³⁹ Voir *npl. I*, p. 1912 (n. 1, p. 1157).

⁴⁰ Voir « Phrénologie », « Celtes », wikipédia.fr (2016.9.15).

⁴¹ Voir « Mémoire d'un parisien », *L'Artiste*, 11 avril 1841 ; *npl. I*, p. 746. (ネルヴァルは文中で骨相学を諷刺している。)

⁴² *Le Peuple*, *npl. I*, p. 305.

革命期、ブルターニュ地方で展開された王党派「ふくろう党」の反乱を描いた歴史小説においても、この初期政治風刺詩の記憶と批判精神が根強く残っているようで、「フランク族対ケルト族」の対立図式が用いられている。

ヴァロワの地にシルヴァネクト族を見いだす

ネルヴァルは、1850年10月から、一連の「ヴァロワ」を舞台とする、散策と思索、歴史と虚構とが渾然一体をなす記事の連載（『塩密輸入たち⁴³』）を始めるのだが、その文面からも、ヴァロワの地にケルトの痕跡を見いだそうとするネルヴァルの意図がみえてくる。

すでに指摘したように、「ケルト」とはヨーロッパ大陸全土とブリテン諸島やアイルランドの島々に広がる、幅広い概念であり、ケルト化されたガリアにおいて、ヴァロワ地方が特にケルト人の土地だったわけではない。ネルヴァルはなぜ、ヴァロワの地にケルトの痕跡を見いだそうと固執するのだろうか。

ネルヴァルが自らのルーツを求める散策の途次、故郷ヴァロワの地に見いだすのは、ケルト系シルヴァネクト族とドルイド教の痕跡である。

『塩密輸入たち』の脱線につぐ脱線の物語の中で、主人公は、ヴァロワの地には、つねに戦鬨が絶えなかったことを思い出す。宗教戦争の時代には、旧教同盟の地であり、ヴァロワの同盟軍は、アンリ・ド・ナヴァール（後のアンリ4世）を首領とする新教徒軍とブルボン王家に敵対していた。

章題の一部「シルヴァネクト族とフランク族」に示されているように、作者は、この地で行われる弓の競技会も、血なまぐさい両民族間の戦いの名残りだと語り、古代に想いを馳せる。

（弓は）かつて、粗暴なシルヴァネクト部族がケルト民族の一枝族をなしていた時代を、まずは想い起こさせ、その時代の象徴になっているのである。（『塩密輸入たち⁴⁴』）

⁴³ この長編の連載記事から、ヴァロワ関連としては『アンジェリック』、『粋な放浪生活』（『ボヘミアの小さな城』）、『ヴァロワの民謡と伝説』が作品として創り出される（その他に『ローレイ』（一部）、『ビュコワ神父の物語』）。

⁴⁴ *Npl.* II, pp. 73-74. ; Voir Jean-Marc Vasseur, « Gérard de Nerval et l'Abbaye royale de Chaalis », *Actes du colloque « Nerval : histoire et politique »*, 2014 (à paraître). 著者はシ

シルヴァネクト族は、ベルギーのゴローワ族の一枝族をなし、中心都市はサンリスであった⁴⁵。しかし、その存在は1世紀頃（ローマ人の支配が確立された頃）の記録に確認され、狭義でのケルト人の活躍した時代（紀元前2世紀頃まで）からは、2世紀ほども後代になる。「ケルト族」ではなく、正確には「（ケルト系）ゴローワ族の一枝族」とすべきなのだが、ここにもネルヴァルの「ケルト」へのこだわりが見られる。

ネルヴァルの文中では、「シルヴァネクト族」は、『塩密輸入たち』でも、また『火の娘たち』所収の『アンジェリック』においても、Sylvanectesと綴られている。つまり、作中に登場するシルヴィ Sylvie や、シルヴァン、Sylvain（『アンジェリック』では森番の息子、『シルヴィ』ではヒロインの兄）に関連づけ、ラテン語の Silvanus（森の神）を連想させて、「森の住民」を暗示するかに見える。しかし、元来はゴローワ語源で、ラテン語碑文では *subbanecti* (*fr.* *subbanectes*), *ciuitas Siluanectum* (*var.* *ciuitas Seluanectum*)と記される⁴⁶。

フランク族とヴァロワ王家

紀元5世紀頃から、ローマ帝国の衰退にともない、北方のゲルマン系フランク族がガリア北西部（広義でのイール＝ド＝フランス）に移住した。やがてローマ人にとって代わり、メロヴィング王家としてガリアを支配し、キリスト教の布教に努めた。ヴァロワ地方におけるローマ帝国支配の中心地であったサンリスも、フランク族系統の王家の支配下に入り、司教座聖堂が置かれて、キリスト教布教の中心地になった。ヴァロワ地方は、第一義的にはフランク族の王家ヴァロワ朝の土地であり、ネルヴァルが思い描くようなケルト人の土地ではない。ケルト系ガリア人たちは、被支配者になったのである。

にもかかわらず、ネルヴァルは、シルヴァネクト族の後裔が「ドルイド教徒」として、フランク族とキリスト教の支配下にも、存続しつづけたと想像し、ヴァロワの地にその痕跡を探し求めるのである。

ヤーリ（博物館と旧修道院遺跡）の館長。寄稿論文を、J.-N. Illouz 氏の好意により、刊行前に参照し、貴重な知見を得た。

⁴⁵ « *Silvanectes ou Silvanectum, ville de la Gaule Belgique* » (*Encyclopédie*, 1^{ère} édition, 1751) ; « *Silvanectes, peuple de la Gaule, dans la Belgique* » (*Le Grand Dictionnaire Universel du XIX^e siècle*, 1866-76). 前者は、シルヴァネクトを町 (Senlis) の名前として、古代ローマの *Augustomagus* に相当するとしている。

⁴⁶ Voir : www.arbre-celtique.com (2016.6.20)

フランク族がガリア（ゴール）の地を制圧したわけではまったくなく、各地方間の争いに巻き込まれずにはおられなかったにすぎないことは、今日ではよく知られていることである。（『塩密輸入たち⁴⁷⁾』）

ネルヴァルはなぜかここでは、史実とも異なり、「支配者対被支配者」、「貴族対市民」という定型的な図式にも従わず、フランク族と先住ガリア人を、隷従・敵対関係にある対立項として描こうとはしない。土地を開墾させるために、ローマ人がフランク族を呼び寄せたのであり、フランク族は「族長的習慣に従って、平等を旨として生活していた。」（同上⁴⁸⁾）と語る。

ネルヴァルは、なぜ従来の見方を変え、ヴァロワの地におけるフランク族とケルト系ゴロワ人の「共存・融和」を強調するのだろうか。

二月革命から共和政へ、そして第二帝政へと移行する政治情勢の変化も、その一因なのかもしれない。『塩密輸入たち』の執筆と連載は、出版統制下（とくに「新聞連載小説」の禁止）に、小説ではない、歴史を描くとして、脱線に次ぐ脱線を重ねて書き継がれた。フランク族とケルト系ゴロワ人の対立の図式は、貴族対市民を想起させ、革命への暗示になる。ネルヴァルとしては、いやがうえにも「政治」に敏感にならざるをえなかったのであろう。しかし、「フランク族とケルト系ゴロワの共存・融和」への変化は、「政治情勢」だけが原因だろうか。

「地方の花束祭り」と弓の競技会

『シルヴィ』の冒頭、パリに住む主人公は、新聞で、「地方の花束祭り——サンリスの射手たちは、明日ロワジーの射手たちに花束を返還する予定」という記事を目にして、懐かしくなり故郷の地に向かう。同じ弓の競技が「粗暴なシルヴァネクト族」の血なまぐさい民族間の争いを想起させた『塩密輸入たち』の記述⁴⁹⁾とは大違いである。

近年でも、ピカルディとイール＝ド＝フランス、シャンパーニュ地方などで行われている弓の競技会は、各地区（村や町）に組織された「コンパニオン（友の会）」を単位に、弓の競技会が催され、地方代表グループを決め、最終的には全仏の（といっても北仏三地方だけなのだが）優勝者を決める⁵⁰⁾。

⁴⁷⁾ *Npl. II*, p. 74.

⁴⁸⁾ *Ibid.*

⁴⁹⁾ *Npl. II*, pp. 73-74.

⁵⁰⁾ Voir https://fr.wikipedia.org/wiki/Bouquet_provincial (2016.7);

したがって、「地方の花束祭り」とは、今風にいえば「地方代表選抜競技会」を意味するのである。各競技会では、優勝トロフィーとして花束で飾った花瓶が授与されるが、村や町の競技会ごとに持ち回り、地方大会では、前年の勝者が花束のトロフィーを返還することから競技が始まる。

弓の競技会の起源は古く（12世紀あるいは14世紀に遡る⁵¹）、さまざまな宗教儀式を伴うが、とくに着飾った乙女たちが踊りながら練り歩く行列、威風堂々たる射手の行進（武者行列）、山車に乗った美しい乙女たち、騎士に仮装した子供たちの行進（稚児行列）等々、復活祭のカーニヴァルを想わせる。時期は花盛りの5月から3ヶ月間かけて、かつては各地区毎に3日間（今日では1日だけ）行われる、盛大な祭りの行事（国指定の無形文化財）である⁵²。

『シルヴィ』の話者は、幼年時代を回想し、以下のように描いている。

雄牛に引かれた重い荷車は、道々で、それらの贈り物 [娘たちが編んだ花束] を受け取り、私たちこの近郷の子供たちは、弓と矢を携え、騎士の称号にふさわしく身を飾って、行列を組んでいたのだが、——王が代わり、新たな宗教に従いながらも、年々歳々、ドルイド教のお祭りをくり返していたのだとは、その当時は知らずにいた。（『シルヴィ⁵³』）

話者は、さきに弓の競技会から「粗暴なシルヴァネクト部族」（『塩密輸人たち』）を想起したが、『シルヴィ』では、弓の競技会をとまなう「地方の花束祭り」もまた、ドルイド教の祭儀を受け継ぐものだとする。

歴史家ヴァスール氏によれば、古代ガリア人は、剣や槍による戦闘を好み、弓は狩のためであって、戦闘用の名誉ある武器とは見なされていなかったもので、弓の競技会の起源を古代ガリア人にまで遡らせるのは恣意的な解釈であり、弓の競技会の階級制度による組織（コンパニオン）は、むしろ、フラン＝マッソン（フリーメイソン）を連想させると指摘する⁵⁴。

しかしながら、宗教思想的あるいは文化人類学的観点とはいわぬまでも、一般的な発想からしても、祭りに神々はつきものであり、子供たちが仮装し、牛に引かせた山車も登場する「花束祭り」に、なんらかの異教的な宗教儀式

http://compagnie.ceciarc.free.fr/bouquet_provincial.html (2016.7)

⁵¹ *Ibid.*

⁵² Voir les photos : « BOUQUET PROVINCIAL DE SOISSONS 19 MAI 1957 », <http://www.arc-soissons.com/en-savoir-plus/bouquet-provincial-de-1957-41265>

⁵³ *Npl. III*, p. 540.

⁵⁴ Voir Jean-Marc Vasseur, article cité.

を想定するのは不自然ではない（弓矢にちなんで、矢に射られて殉教した聖バルテレミーを祀るとはいえ）。

雑誌記事『カーニヴァルの飾り牛』（1845）で、ネルヴァルは、モンマルトルを練り歩く牛に引かれた山車の行列に、古代ギリシア・ローマの神秘的な儀式の名残りがみられると語り、またモンマルトルの食肉業者組合宛ての手紙（1850.2.12）でも、「（飾り牛の行進は）われらが祖先、ゴローワ人たちから受け継ぐ健全なる伝統である」と書き送る⁵⁵。カーニヴァルそのものが、キリスト教以前の古代宗教を受け継ぐものであることは、広く一般に認められている。

「花束祭り」の盛大な行事を見ると、弓の競技会は、元来は祭りのいわば奉納行事の一部にすぎないだろう（流鏝馬や奉納相撲とはいわぬまでも、例えば神々に奉納するために催された古代ギリシアのオリンピック競技を思い起す）。さりながら、ネルヴァルが「地方の花束祭り」に、とくにドルイド教の名残りを見いだすのは、やはりヴァロワの地をケルトに結びつけようとする意図的なものだといわざるをえない。

「ドルイド教の石」

エルムノンヴィルのドルイド教の石、石斧、そして墓石、その墓の中では遺骸はつねに顔をオリエントの方角をむけている。これらのものは、森林地帯によって分断され、今日では湖となっているが、かつては沼だった沼沢地に覆われたこの地方に住む民族が、どこから来たのかを、証し立てていないわけではない。（『塩密輸入たち⁵⁶』）

「エルムノンヴィルのドルイド教の石」とは、いったいなにを指すのか。

『シルヴィ』にも、類似の表現が使われているが、そこでは「石」が「岩」に代えられ、「ドルイド教の岩々」になっている。そして、最晩年の作である『散策と回想』では、エルムノンヴィルの森にある「ドルイド教の巨石（ドルメン）」に、代えられるのである⁵⁷。

⁵⁵ « Le Bœuf gras », *l'Artiste*, 9 février 1845 ; *npl. I*, pp. 900-902) ; *npl. I*, p. 1442.

⁵⁶ *Npl. II*, p. 74.

⁵⁷ « les pierres druidiques d'Ermenonville », *npl. II*, p. 74 ; « ces rochers druidiques de la contrée », *npl. III*, p. 547 ; « Célénie montait sur les roches ou sur les dolmens druidiques », *npl. III*, p. 689.

どうやら、ドルイド教の祭儀の場として用いられたと想像されていた「ドルメン」を、エルムノンヴィルの森に設定しようという、ネルヴァルの意図が、表現の変化に見えてくる。

先にふれたが、近年にいたるまで、一部の熱烈なケルトマニアの間では、巨石遺構で、祭儀が催されているようだが、考古学的には、巨石遺構の創建は（例えばカルナックのメンヒルは紀元前4千年から前2千年頃）、ケルト人たちの登場よりも千年あるいは2千年以上は古いとされている。さりながら、古代のドルイド教の祭司たちが、巨石を祭場として用いたとする説は、あながち否定できない⁵⁸。

ドルイド（祭司）たちが森と沼の土地に住む「隠遁者」という設定も、ゴロワ人が毛皮を着て弓で狩をするという「蛮族」の想定と同様に、19世紀にはそのようなガリア人の型どおりのイメージができており、その後20世紀に入ってから、マンガなどに描かれて⁵⁹、いったん定着したイメージはぬぐい去りがたいものがある。

ヴァロワの地に「ケルトの痕跡を探す」ことは、キリスト教の支配下にも生き延びたドルイド（祭司）たちを探し求めることでもあり、どうやら『東方紀行』に登場するフラン＝マッソンの宗祖アドニラムと、地下に隠れ潜んで大洪水を生き抜いたカイン一族の挿話などと、ネルヴァルの想像の中で通底している⁶⁰。さらに言えば、痕跡を探すことが、ヴァロワの地にケルトの痕跡をつくり出すことになり（「石」が「巨石（ドルメン）」になる）、ヴァロワの地をケルト人とドルイド（祭司）たちの神聖な土地として創造し、描き出すことに通じるのである。ネルヴァルの最高傑作『シルヴィー ヴァロワの思い出』における「ヴァロワ」は、このようにして創り出された。つまり、思い出すことは創造することなのである。

⁵⁸ 巨石と祭儀の挿絵があるのは、例えば、上記註(10)の引用文献、pp. 78-79; Christiane Eluère, *L'Europe des Celtes*, Gallimard, 1992. 同書日本語訳、『ケルト人 甦るヨーロッパ「幻の民」』（創元社、1994、p. 123、鶴岡真弓監修）。

⁵⁹ 例えばガリア人を主人公とするマンガ『アステリクス』*Astérix le Gaulois* (1959-)。

⁶⁰ 『東方紀行』の「アドニラム」の挿話は、フラン＝マッソンの宗祖の神話伝説でもある。「Adoniram», *Voyage en Orient, npl. II*, pp. 671-675.

「エルマンあるいはアルメン」

すでに引用したが、「(墓の中で) 遺骸はつねに顔をオリエントの方角をむけている」(『塩密輸入たち⁶¹』)ことは、ケルト人たち(シルヴァネクト族)が、どこから来たのかを指し示しているのだと、ネルヴァルはいう⁶²。

さらに、同じテーマが、同じ作品のなかで、より具体的に物語風の表現が付け加えられて、展開される。森番の息子シルヴァンに案内されて、話者はシャーリの城を見物する。城の一室に、彼が遺跡で発見した僧侶の遺骸が置かれていた。

石棺のなかに横たわる遺骸をみて、私はそれが僧侶ではなく、当時の風習に則して、——顔をオリエントに向けて——寝かせて置かれた、ケルト族かフランク族の戦士だと、想像した。(『塩密輸入たち⁶³』)

さらに、話者は墓の置かれた場所について、地名の語源的な説明を加える。

「エルマン」あるいは「アルメン」という名は(1)、この近隣ではごく一般的な名前であり、「エルムノンヴィル」というすぐ近くの村の名前を引くまでもないことだ。ただし、この地方では、昔から「アルム＝ノンヴィル(あるいはノンヴァル)」と呼びならわしてきた。(同上⁶⁴)

作者自身が引用(1)の箇所を註を付けている。

⁶¹ *Npl. II*, p. 74.

⁶² 「フランク族」の項目(wikipedia.jp 2016.7.5)に、「4世紀の後半に北ガリアに出現する行列墓と呼ばれる遺跡で、頭部を東に向けて遺体を埋葬した墓穴が整然と列をなしている。[...] この行列墓では遺体は、盛装した上で武器を副葬するというゲルマン的伝統に繋がる方法で、ローマ的伝統に繋がる石棺に埋葬された。」引用文献: Joachim Werner, *Zur Entstehung der Reihengräberzivilisation, Praehistorische Zeitschrift* 34-35, 1949-50, pp. 178-193. 1950年の説(本論筆者は未参照)。ネルヴァルがどこでこのようなゲルマン(フランク族)の埋葬法を知ったのか、不詳。「顔をオリエントに向けて」埋葬される風習については、19世紀の旅行記などに幾つか記載がある。例えば、北アフリカのモール人について: Jean-Baptiste-Benoît Eyries, *Abrégé des voyages modernes: depuis 1780 jusqu'à nos jours*, t. 10, 1824, p. 16; *Revue de l'Orient*, bulletin de la Société orientale, t. 2, 1843, p. 20; Jean Grancolas, *Les Anciennes Liturgies*, t. 2, 1699, p. 519.

⁶³ *Npl. II*, p. 97; (*Angélique, npl. III*, p. 520.)

⁶⁴ *Ibid.*

« les noms d'Erman ou d'Armen* »

« *Hermann, Arminius, ou peut-être Hermès. » (note de Nerval⁶⁵)

プレイヤー版の註釈者は、この箇所について、「エルムノンヴィル」は、9世紀にこの村の司祭であった「エルムノン」の名に由来すると、ネルヴァルの誤った語源説を一蹴する⁶⁶。たしかに、19世紀の語源説には恣意的なものが多い。

作者自身の註によると、ラテン語名をアルミニウス *Arminius* としており、ゲルマン諸族を率いてローマ軍と戦って勝利したケルスキ族の族長の名前を指すことになる（ギリシア語名の「ヘルメス」は神話的暗示なのか）。

「アルミニウス」はフランク族であり、ガリア人とする説は誤りである。ヴァスール氏は、人名としては「アルメン」はゴーロワ語系、相当するゲルマン（フランク）語系の名前が「ヘルマン *Herrmann*」（「エルマン *Erman*」は誤り）と指摘する⁶⁷。

いずれにせよ、エルムノンヴィルの語源としては誤りにすぎないのだが、土地の名前をケルト語系ガリア人へ、あるいはゲルマン語系フランク族へと連結させたいというのが、ネルヴァルの意図なのだろう。

ネルヴァルは、「埋葬されたのはケルト族かフランク族の戦士」だと推測し、それと「アルメン（ゴーロワ語）かヘルマン（ゲルマン語）」に結びつける語源説を展開して、この土地がケルト人（ガリア人）か、あるいはその後には支配者となるフランク人の系譜に連なることを暗示するのである。

『シルヴィ』ではさらに、「ローマ軍に殺されたアルメンの息子たち」という表現に発展し、ゴーロワ語系統の「アルメン」を用いて、ケルト系の戦士たちの精霊が宿る土地を描く。

物語では、主人公は祭りの後、夜中に森のなかをさまよい歩いて、一夜を過ごすことになる。

右手や左手に、道も敷かれていない森の境界が拡がり、私の目の前にはつねに、この地方のドルイド教徒の岩々が突き出ており、ローマ人たちによって殺戮されたアルメンの息子たちの記憶を宿しつづけているのだ！ その積み重なった崇高な岩々の上からは、遠くに池や湖が、霧につつまれた平原の上に、鏡のよ

⁶⁵ *Ibid.*

⁶⁶ *Npl. II. p. 97 ; p. 1353, n. 5.*

⁶⁷ Voir Jean-Marc Vasseur, article cité.

うにくっきりと浮かび上がっていたが、祭りがおこなわれた池がどこなのかは見分けられなかった。（『シルヴィ⁶⁸』）

「ローマ軍に殺されたアルメンの息子たち」とは、フランク族の族長（あるいはネルヴァルの想定ではケルト族の）アルミニウス（アルメン、ヘルマン）に率いられ、ローマ軍と戦って死んだ戦士たちを指すのだろう。その不滅の靈魂を宿しているのが、「ドルイド教の岩々」なのであり、エルムノンヴィルの森だということになる。森の奥から、夜の闇に浮かび上がる巨石（ドルメン）が、戦士たちの墓であり、ドルイド教の神殿となる⁶⁹。

かくして、強引ともいえる語源説から、ネルヴァルの想像力は飛翔し、エルムノンヴィルの森全体をドルイド教の精霊たちが宿る土地に変えてゆくのである。

「ドルイド教的な景色」

エルムノンヴィルの城の庭園には、小さな湖があり、その中にポプラの木の生えた島が浮かぶ。そのポプラの木の根元にルソーの墓が置かれている。『塩密輸入たち』の話者は、近くの僧院を訪れ、墓場のある小高いテラスの上に上がる⁷⁰。すると目前に「この地域でももっとも美しい景色が広がる」、その光景を描く。

茶色の大きな木々や松の木、そして緑のオークの木々の間から、湖水がキラキラと輝いて見える。左手に砂地の荒地がドルイド教的な景色を見せている。右手にはルソーの墓が見え、さらに遠く、湖の岸辺に大理石の神殿がある。「真理」の女神を祀るのだろうが——女神は不在である⁷¹。

荒地の広がる「ドルイド教的な景色」とは、どのようなものだろうか。

「エルムノンヴィルの荒地 *le désert d'Ermenonville*」について、ネルヴァルは作中で幾度か描写する（時に大文字で *le Désert* と書かれるが、「砂漠」ではない）。

⁶⁸ *Npl. III*, p. 547.

⁶⁹ 実際に「ドルメン」がエルムノンヴィルの森にあるという話は聞かない。

⁷⁰ もしも、シャーリの僧院だとすると、このような眺望は（少なくとも今日では）、森に遮られて不可能。『シルヴィ』では、塔の上に登ることに変えられる。

⁷¹ *Npl. II*, p. 104.

エルムノンヴィルの荒地地と呼ばれる、なにも生えていない細長い空地は、やせた松の木とヒースが入り混じる、灰色をした砂地をみせているだけである（『塩密輸入たち⁷²⁾）

ほこりっぽい砂地と、ピンク色のヒースが緑のシダを際立たせている荒地地（『シルヴィ⁷³⁾）

ネルヴァルの研究者はかつて、20世紀初頭に現地を調査し、つぎのように記している。

エルムノンヴィルの荒地地は、大きな池の端から広がる。耕作されていない荒地地で、とても起伏に富むこの森の周囲に点在する。ヒースに覆われた場所や、大きな砂岩が散在する砂丘に覆われている場所もある⁷⁴⁾。

このような荒涼たる景色を、ネルヴァルは「ドルイド教徒たちの好んだ荒れた土地」として、描いたのだろう。ネルヴァルより早い時期、1838年に、ブルターニュ半島を旅行したスタンダールが、荒れた天気をかこち、「ドルイド教的天候」と、やや皮肉をこめて旅行記に書き付けるのも、同様の発想なのか（但し、ネルヴァルの表現にはスタンダールの皮肉はこめられてはいない）⁷⁵⁾。

「ヤドリギを切るドルイドたち」

エルムノンヴィルの森を歩くと、そこここに碑文の刻まれた石が見いだされ、碑文には「ヤドリギを切るドルイドたち」を描いた浅浮き彫りの図も添

⁷²⁾ « les longs espaces dénudés qu'on appelle le désert d'Ermenonville », *npl. II*, p. 98.

⁷³⁾ *Npl. III*, p. 558.

⁷⁴⁾ Jacques Boulanger, *Au pays de Gérard de Nerval*, Honoré Champion, 1914, p. 151 ; 巻末に附された地図には、エルムノンヴィルの城のほぼ北に、le Désert と明記されているが、「荒地地」はこの場所だけではないようだ。Jean-Marc Vasseur (article cité)によると、この場所は、「砂漠 la mer des sables」ではないというが、J.Boulanger の調査では、荒地地は点在し、「砂漠」も含まれる。

⁷⁵⁾ Stendhal, « Ce matin, à cinq heures, en partant de Vannes pour Auray, il faisait un véritable temps druidique. », Aurei, le 6 juillet, *Mémoire d'un touriste*, (publié en 1838), *Œuvres complètes*, t. 16, Cercle du bibliophile, 1968, p. 9. ブルターニュ半島で、巨石遺構があるカルナック近くまできたスタンダールは、「ドルイド教的天候」と書き付ける。（『ある旅行者の手記』, 2巻, 新評論, 1985, p. 15.）「ドルイド教的」というのは、カルナックの巨石遺構とドルイド教を結びつけた連想によるもので、スタンダールらしいアイロニーがこめられている。（Auray, Aurei 原文のまま）

えられていると、話者はいう。この図柄は、ネルヴァルのお気に入りのように、『塩密輸入たち』、『アンジェリック』、そして『粋な放浪生活』でも用いられている⁷⁶。

とくにオークの木に生えたヤドリギは、ドルイド教徒たちにとって聖なる木とみなされていた。祭式の記述は、大プリニウス『博物誌』に由来する。

ドルイド——これは彼らが彼らの魔術師を呼ぶ名である——はヤドリギとそれが宿っている木よりも神聖なものはないと考えている。ただそれはカシ〔本論筆者註：ヨーロッパナラ、オーク〕にかぎるのだが。〔…〕しかしヤドリギがカタガシ〔同上〕に生えているのはめったに見られない。そしてそれが見つかると、それは盛大な儀式をもって採取される。〔…〕白い法衣を着飾った一人の僧侶がその木に攀じ登り、金色の鎌でそのヤドリギを切り落とす。〔…〕彼らは、飲み物に入れて与えられたヤドリギはどんな不妊の動物にも生殖力を与え、そしてそれはすべての毒に対する解毒剤だと信じている。（『プリニウスの博物誌⁷⁷』）

ゴーロフ人たちの神「エスス」は、「ドルイド教で神聖な木とされるヤドリギを人間に与えるために、鉈をもってヤドリギを切り取る姿で描かれている」という、『マガザン・ピトレスク』の解説を思い出そう。ネルヴァルが描くように、エルムノンヴィルの城の庭に、もしも「ヤドリギを切るドルイドたち」を描いた浅浮き彫りの石があるとすれば、それは18世紀の模造なのだろうが、むしろ「船乗りの塔」の「エスス」の図柄を想起する作者の仮想にすぎず、「ドルメン」と同様に、ケルトの土地を創出する神話的装飾のひとつなのだろう。

さきに、『東方紀行』にはケルトに関する記述がないと書いたが、一箇所だけ、ドルイド教のヤドリギに関する記述が、本文中ではなく、作者が付した註のなかにある。

精霊の王ソロモンは不死を願い、精霊たちを駆使して、死に対するありとあらゆる防御を固めたのだが、250年後に玉座が朽ち果て、ついに王は倒れた。玉座の脚を蝕むコナダニを見すごしていたからだった、というエピソードの箇所に、作者が欄外に註を付したものである。

⁷⁶ *Npl. II*, p. 102. (*npl. III*, p. 524 ; *npl. III*, p. 298.)

⁷⁷ 『プリニウスの博物誌』第16巻95「ガリアにおけるヤドリギの崇拜」(雄山閣, 1986, 第2巻, p. 704, 中野定雄他訳)。

このオリエントの伝説と類似するエピソードが、北欧神話にも見いだされるという。夫婦の神、オーディンとフレイヤは、彼らの子バルダーの命を守るために、すべての防御を固めたのだが、

彼ら（オーディンとフレイヤ）はオークの木のヤドリギを忘れていた。この目立たぬ植物が神々の子の死の原因となった。それゆえ、北欧（スカンディナヴィア）の神話の後継者たるドルイド教においては、ヤドリギが聖なる木と見なされたのである。（『東方紀行⁷⁸』）

ドルイド教を北欧神話の後継者と見なし、ネルヴァルの想像力のなかでは両者が密接に結びついているようである。

森の王である少年と、魚の女王である少女が登場する汎神論的な小話『魚の女王』（『火の娘たち』所収）のなかでも、北欧神話のオーディンが引用されている。「オーディンの息子のように」怒り狂った木こりのトール＝シェヌ（オークの木をねじ切る力持ち）が、仲間を集めて森林を伐採しようとする。

いにしへのドルイド教徒たちが聖なる木とした多くの木々が、すでに斧と鉞（まさかり）によって切り倒された。（『魚の女王⁷⁹』）

魚の女王は、周囲の三つの川の神たちに助けを求めて、森林を守るのである。

このようなネルヴァルの『ヴァロワの民謡と伝説』の収集もまた、グリム兄弟やシュレーゲル兄弟ら、ドイツ・ロマン派の「民謡・民話」の探求に呼応し、雑誌発表時の題『フランスの古いバラード⁸⁰』は、ドイツ・バラード（物語詩、譚詩）を意識している。それを「ヴァロワの民謡と伝説」（『火の娘たち』所収）と改題したことには、「ヴァロワ」をフランスの歴史的な中心地、すなわち伝統の原点たる「ケルトの土地」に仕立てる意図がはたらいっている。

ネルヴァルによると、「ケルト人」はオリエント起源であり、他方で「ドルイド教は北欧神話の後継者」であるとする。兵士たちの遺骸にも、「エルムノンヴィル」の語源説にも、「ケルト族か、あるいはフランク族」という

⁷⁸ *Npl. II*, p. 771.

⁷⁹ *Npl. III*, p. 578.

⁸⁰ « Les Vieilles Ballades françaises », *La Sylphide*, le 10 juillet 1842 ; *npl. I*.754-761.

二重性が、意図的に付与されており、ネルヴァルにとってもはや、この二項目が対立する観念ではないことを示している。

ネルヴァルの探求は、この時点では、どうやら異なる民族の「融合」（あるいは「混在」）と、神話や宗教の「混淆」にあるようで、多様であって融合的な神々や精霊たちが、一神教の支配下にも生き延びてきていることの痕跡を、丹念に探し求めて、想像力を豊かに飛翔させているのである。そしてそのような共存と融和とを可能にするのが、「ユートピア」のごとき「ヴァロワの土地」なのである⁸¹。

セレニー　ゲルマンの水の精にしてケルトの森の精

『散策と回想⁸²』は、『オーレリア』と並行して別の雑誌に連載され、最終の第3回目は、同様に死後に発表された遺作である。『オーレリア』が入院生活での閉鎖的空間における夢の記述を主とするのに対して、この作品は、パリからサンジェルマン＝アン＝レーへ、そしてヴァロワ地方へと、空間を移動するにつれて、少年からさらに幼年時代へと遡る回想が、開かれた空間のなかで、郷愁をこめて語られる。

幼なじみの少女たちが登場するが、その最後に現れる少女は、ゲルマン伝説の不思議な「水の妖精ニックス」の姿をしている。

セレニーは、しばしば私の夢の中に、水の妖精として現れた。セロリと睡蓮の葉を編み込んだ冠を頂き、草原の香りに熱烈に酔いしれた、人を誘惑する無邪気な乙女の姿で、その子供らしい笑顔のなかに、えくぼを浮かべた頬の間に、ゲルマン伝説の水の精ニックスの真珠の歯をみせていた。そしてたしかに、その着物の裾は、いかにも彼女の同類の者たちにふさわしく、ほとんどいつも水に濡れていた……（『散策と回想⁸³』）

水の精セレニーは、ライン川の岸边に姿を現わし、美しい歌声で舟人を惑わし、深い淵へと誘う、ゲルマン系のローレライ伝説を思わせる。

⁸¹ ネルヴァルの死後に描かれたコロの絵「モルトフォンテーヌの思い出」（1864）には、少女たちが木の上に手を伸ばして、鎌で花を切り取ろうとしている図がある。ヤドリギを切る仕草であり、19世紀風に描いたドルイド教の儀式を暗示している。

⁸² « Promenade et souvenirs », *L'illustration*, 30 déc. 1854 ; 6 janv. 1855 ; 3 fév. 1855.

⁸³ *Npl. III*, p. 687.

あなたもご存じですね、わが友よ、私と同じように、かのローレリー、つまりローレライを、——コブレンツ近郷の村バハラッハの濡れた岩の上に、バラ色の足を滑らせることもなくしっかりと置いている、あのライン河の妖精を。斜めに傾けた身体のうち、首すじをしなやかに伸ばし頭をたてているその姿を、あなたもみかけたことでしょう。金色の羅紗の折り返しがついた、深紅のピロードの頭巾が遠くに輝き、まるでエデンの園にすむ年経た龍の血色をした肉冠のようだ。（『ローレライ』1852⁸⁴）

セレニーには、同じ水の精とはいえ、「年経た龍の血色をした肉冠」というようなローレライのおどろおどろしさはない。彼女は同時に、「ドルイド教の巨石（ドルメン）」の上に登った、「シルヴァネクト族の古い土地の巫女」の姿でも描かれる。

セレニーは、岩の上や、ドルイド教の巨石（ドルメン）の上に登って、羊飼いの少年たちに、このような伝説を話した。シルヴァネクト族の古い土地の、この小さな巫女ヴェレダは、私に多くの思い出を残し、それが時とともに鮮やかに蘇る。彼女は どうした だろう？ ラ・シャペル＝アン＝セルヴァルか、あるいはシャルボン、またはモンメリアンの方に、彼女の消息を訊ねにゆこう……（『散策と回想⁸⁵』）

ヴェレダは、タキトゥスの歴史書では、ゲルマン人たちの巫女・預言者で、ゲルマン族全体に大きな影響力をもち、紀元1世紀末にローマ人に対する反乱を導いたとされている⁸⁶。つまり、セレニーには、ケルト系（シルヴァネクト族）の土地（森）の精霊であると同時に、ゲルマン系の水の精、さらにはゲルマン族の巫女のイメージも重ねられている。相矛盾するようなこの二重性・三重性はなぜなのだろうか。

シャトーブリアンの『殉教者たち』（1809）に登場するヴェレダは、ブルターニュ半島に住むケルト人とされ、ドルイド教徒たちの巫女であり、大祭司とされている⁸⁷。この地方のローマ軍司令官でキリスト教徒であるウッドールと、異教徒の娘ヴェレダとの悲恋と、そして彼女の悲劇的な死は、刊行直後から大きな反響をよび、以後の「ドルイド教の巫女」のイメージを形成し

⁸⁴ « Lorely, Souvenirs d'Allemagne », 1852, *npl. III*, p. 3.

⁸⁵ *Npl. III*, p. 689.

⁸⁶ Tacite, *Histoire*, Livre IV (61), (<http://bcs.fltr.ucl.ac.be/TAC/HistIV.html#61> 2016.7.11); タキトゥス, 「ゲルマニア」, 『世界古典文学全集 22』, 筑摩書房, 1965, p. 358.

⁸⁷ F.R. de Chateaubriand, *Les Martyrs ou le triomphe de la religion chrétienne*, Le Normant, impr.-lib., 1809.

た。オペラにもなり、ロマン派の文学・美術作品にしばしば登場するが、とりわけ、1844年に発表されたイッポリット・マンドロンの彫刻は人気を博し、リュクサンブール公園に飾られ、ルーヴル美術館にも収められている⁸⁸。

シャトブリアンの描く「ケルト人」や「ドルイド教」の描写（森の住人、人を犠牲に捧げる秘儀的祭儀、戦士）は、舞台をブルターニュに移してはいるものの、ギリシア・ラテン文学以来の伝説的かつ定型的な「異教の蛮族」のイメージに即したものであり、以後も広く一般に定着していった。ネルヴァルの文中で、比喩としてヴェレダが用いられているとはいえ、村の娘セレニーとは、根本的に異なる存在である。

セレニーの消息を訊ねに行った先で、語り手は、彼女が結婚し、子供も産んだが、「胸を病んで死んだ」ことを知らされて、衝撃を受ける。

そして、いま私の脳裏には、「居酒屋の娘」というドイツ・バラードとその三人の仲間たちが浮かんでくる。そのうちの一人が言った、「ああ、彼女のことを知っていたなら、なんと愛していただろう！」——すると、二番目の男が「あなたを知っていた、そしてやさしく愛した！」——そして三番目が「あなたを知らなかった……でもあなたを愛し、永遠に愛しつづけよう！」（『散策と回想⁸⁹』）

セレニーの姿が宙に漂い、浮かぶ。

さらにひとつの金髪の姿が、灰色のもやに浸されたこの森の地平線に、色あおざめた姿で現れ、くっきりと浮かび上がり、そして冷たくなって降り立つ……（同上⁹⁰）

かくして、若くして死んだセレニーも、ヴァロワの森と一体化し、ケルトの森の精の一人として、またゲルマン伝説の水の精として、美しく描かれるのである。

⁸⁸ Hyppolyte Maindron, *Velléda contemplant la demeure d'Eudore*, (1844); ちなみに、コロニーにも『ヴェレダ』（ルーヴル美術館蔵）を描いた絵があるが、ネルヴァルの死後、1868-70年に描かれたものである。

⁸⁹ *Npl. III*, p. 689. ドイツ詩人ウーラントの「居酒屋の娘」（原題は「女主人の娘」）をもとにした翻案だが、原文とも数ある翻訳とも合致しないので、ネルヴァルの意図的な改変と見なされ、ここに彼の究極的な恋愛観を探る糸口を見るジャン・ギョームの説もある。

⁹⁰ *Npl. III*, p. 690.

ヴァロワの地のユートピア

セレニーこそが、ネルヴァルがヴァロワの地に探し求めた、究極の女性像なのだろう。胸を病み若くして死んだ村の娘、水の精、森の精、そしてドルイド教の巫女と、二重性、三重性をおびて描かれたセレニーのかけには、ヴァロワの地に生まれ、北方ゲルマンの地で若くして死んだ母への追憶がこめられているようである。

ケルト神話とゲルマン神話とが、想像の中で融和し、ヴァロワの地が古代の理想郷をなすかのようなものである。ケルトの痕跡を探し求めたネルヴァルの旅路は、異種の神話が融和する「ユートピア（どこにもない場所）」を、ヴァロワの地に創り出した。

ネルヴァルは、古代ケルトから伝わるドルイド教をヴァロワの地に重ねることによって、そのケルト幻想のなかから、森の精シルヴァンや、幼友達であると同時に美しい森の精（あるいは女神⁹¹）でもあるシルヴィを創造し、さらには、ケルトの巫女であると同時にゲルマン神話の水の精でもあるセレニーを描き出すことに、成功したのである。

ネルヴァルのケルト幻想とは、古代から伝わる「土地の精霊」を喚起する呪文のようなものだったのかもしれない。彼自身にとっては、キリスト教以前の汎神論的な精霊を呼び出すことで、『オーレリア』と同様に、大地の母なる神イシスと聖母マリアとの混淆による「永遠の母」への救済祈願につながる、自己救済の道程でもあったのだ。

⁹¹ « son sourire, éclairant tout à coup des traits réguliers et placides, avait quelque chose d'athénien », *npl. III*, p. 546.